

課題に関する自己決定感と個人の動機特性が課題成績に及ぼす影響

杉村 亜美

日常生活のあらゆる場面で、やる気を高めることは質の高いパフォーマンスを行うため、または精神的健康を保つために重要である。このような動機づけについて、Ryan & Deci(2000a)は自己決定感が高い状況で、パフォーマンスが高まるとする自己決定理論を提唱した。しかし、個人特性に関する観点を含めたとき、自己決定感が低い状況でもパフォーマンスが高まることを示す研究も存在する。つまり、人が各々有しているパーソナリティ(動機特性)やその人の置かれた状況について考慮する必要があると考えられる。そこで、本研究では個人特性として3つの動機特性(「自己志向的動機」「他者志向的動機」「他者志向的動機の否定」)を用いて、課題に関する自己決定感の高低(状況要因)との相互作用がパフォーマンスに与える影響について検討した。

まず、パフォーマンスを高めるために重要である目標設定について、自己決定感の高低を操作するため、実験Ⅰでは、目標を自分で決める自己設定条件と他者が決める他者設定条件を設けた。本研究において、自己設定条件は自己決定感が高く、他者設定条件は自己決定感が低いと定義した。そして、3つの動機特性と目標設定に関する条件(自己設定条件・他者設定条件)がアナグラム課題(無意味なひらがなの文字列を並び替えて有意義語にする課題)の成績に及ぼす影響を検討した。また、参加者は主観指標として、アナグラム課題終了後に課題に関する5項目の質問紙(「楽しかった」など)に回答した。実験Ⅰの結果、他者設定条件で「自己志向的動機」が高い人は低い人よりも課題成績が低かった。さらに、目標に関する設定条件に関わらず「他者志向的動機」が高い人は、低い人よりも課題成績と主観指標の得点が高かった。「他者志向的動機の否定」については、課題成績に及ぼす影響は見られなかった。実験Ⅰにおいて、目標に関する設定条件と動機特性がパフォーマンスに及ぼす影響は見られたが、より自己決定感が高い状況において、実験Ⅰで支持されなかった結果についての再検証と実験Ⅰで支持された結果の再現性の検討をする必要があると考えられた。そこで、実験Ⅱでは、自己決定感の高低を強調するために、目標設定に加えて課題に使用するペンについても自己設定と他者設定の条件を設けた。実験Ⅰと同様にアナグラム課題を行い、課題に関する質問紙を主観指標として用いた。その結果、「自己志向的動機」が高い人は、他者設定条件より自己設定条件において課題成績が高いことが示された。また、「他者志向的動機」が高い人は低い人よりも設定条件に関わらず主観指標の得点が高かった。そして、「他者志向的動機の否定」については、課題成績に及ぼす影響は見られなかった。

実験Ⅰ・Ⅱの結果から、「他者志向的動機の否定」がパフォーマンスに及ぼす影響は見られなかった。これは、課題のプレッシャーが「他者志向的動機の否定」が喚起されるほどには、大きくなかったためだと考えられる。また、「自己志向的動機」が高い人は自己決定感が高い状況でパフォーマンスが高まり、自己決定感が低い状況で、「自己志向的動機」が低い人よりもパフォーマンスが低下することが示された。さらに、「他者志向的動機」が高い人は、設定条件に関わらず、低い人よりもパフォーマンスや主観指標の得点が高いことが示された。これは、実験参加自体に参加者の「他者志向的動機」が促進されたためだと考えられる。以上より、自己決定感の高低のみでパフォーマンスに及ぼす影響を説明することは不十分であり、個人の動機特性が単独で、または自己決定感と相互作用して、パフォーマンスに正や負の影響を与えることが示された。(安全行動学)